教科等研究会（小・中学校書写部会）

令和２年度　研究活動のまとめ

１　研究テーマ

書くことに意欲と喜びが持てる書写指導の在り方
～自ら気づき、高め、楽しんで日常生活に役立てる実践を求めて～

２　研究経過

第１回			第２回			第３回			第４回		
９／１	１３名	広安小	１０／２７	広安小	実践報告及び実技研修 藤川亜紀教諭（広安小）	２／５	広安小	実践報告会 （中止）			

３　研究の概要

（１）研究の内容

今年度は、昨年度までの研究をさらに進めるとともに、児童生徒に、『書くことに喜びや楽しさを感じ、文字を書くことを好きになってほしい。』という思いから、研究テーマを「書くことに意欲と喜びが持てる書写指導の在り方」とした。また、サブテーマで、児童生徒が学びをより楽しんで、日常生活につなげることを目指した実践に取り組むことを明確にした。

書写指導において、学習課題を明確化し、ポイントをつかんだ練習をすることで、児童生徒はその時間の課題を達成し、文字が上達していく。その達成感により、それぞれが自分の書いた文字に自信が持てるようになると考える（「分かる・できる」）。そして、その自信が「書くことに意欲と喜びが持てる」ことにつながっていくと考える（「楽しい」）。

「自ら気づき、高め」とは、児童生徒が試書→練習→清書→評価という学習活動の中で、試書と手本の文字を比較し、学習課題を達成するためにはどのような改善が必要かを自ら考えるとともに、自分自身の課題も意識して練習し、より良い文字となるような作品作りに取り組む姿であると捉えた。また、「楽しんで日常生活に役立てる」とは、書写の学習で学んだことを各教科の学習や生活の様々な場面（模造紙へのまとめや手紙、書き初め等）で積極的に生かす態度を育成することだと考えた。

実技研修は、毎年会員からの要望を聞いて取り組むこととしている。今年度は、書写指導における課題のとらえさせ方や小筆の指導方法等、実践的な書写指導について学びたいという意見が出された。そこで、児童生徒が作品を仕上げる際のポイントとなる中心線のそろえ方や行間・字間の取らせ方等について、実技を通して学び、意見交換をする機会を設定した。

研究授業については、これまで小学校と中学校が毎年交互に担当し、相互の立場から意見交換する形で研究を進めてきたが、今年度は、部会の開催が叶わなかったため実施していない。また、年度末にレポートによる実践報告会を計画したが、これも実施することができなかった。そこで、小・中の連携を図るとともに、書写の喜びや楽しさを味わわせる活動の工夫や、技術を高めるための指導法、日常生活へどうつなげていくか等について、会員同士で共有できるように冊子にして配付することとした。

（２）成果と課題

実践報告及び実技研修では、「児童生徒が作品を仕上げる際の五つのポイントについて」として、広安小学校の藤川教諭の実践報告と実技研修を行った。文字の大きさ、行の中心、字間、行間、余白の取り方等、教科書の題材を実際の授業に取り組むように書いてみることで、児童生徒が練習で難しさを感じる点や課題解決に有効な手立てを学ぶことができた。参加者も児童生徒になったつもりで意欲的に取り組み、互いの疑問や悩みをその場で出し合いながら、より実用性の高い実技研修ができた。また、児童・生徒が「自ら気づき・高め」るための目標（めあて）の設定のさせ方についても、手本の文字に近づけるために、前出の五つのポイントに絞りこみ、自分に必要なポイントを意識して練習することで、「上達した」「目標をクリアできた」といった達成感につながることも実感することができた。第１回部会で、書写指導の悩み等について具体的に出し合っており、藤川教諭にはその点を解決するような教材・教具のアイデアを多く用意していただいた。実技研修で実際に使ってみることで、その後の授業でぜひ使いたいと、参加者の意欲も大いに高まった。

今回の実践報告及び実技研修で、参加者からは、「書道や書写指導の基本を改めて学ぶことができた。」「書写指導の実用的なアイデアをたくさん学ぶことができ、ぜひ実践したい。」といった感想が出され、参加者にとって、授業への意欲が高まるような有用な実技研修ができた。

【児童生徒一人一人の目標設定のさせ方について】
- ５つのポイントから自分で目標を決めて練習させていくという指導方法を聞いて、ぜひ取り入れたいと思った。一人ひとりの課題は児童生徒によって違うので、意欲につながると感じた。
- 第１回部会での課題をもとに、その解決につながる大変有意義な時間となった。中学校の書写の時間でも、今回学んだ５つの視点を特に気を付けて書かせたい。“探らせて気づかせる”ことから実践することを心がけて授業をしていきたい。

【書写指導の基本、指導のアイデアについて】
- 水書での練習は、汚す心配もなく、生徒も楽しく書くことができるかもしれない。ぜひ試してみたい。
- クリアファイルの中に手本や練習用紙を入れて行う敷き書きは、中心線や行間の目安が見えていることで、書いているうちにその感覚が自然に身につくと感じた。加えて、この方法は、書写に苦手意識を持っている生徒の自信につながり、「楽しい」と思えるのではないかと思った。中学校でも取り入れたい。
- 余白の意識が足りなかったと気付いた。小・中合同の部会だからこその学びだった。
- 名前のおさめ方、紙の折り方などさっそく授業で実践してみたい。ペットボトルキャップや新聞紙の使い方など、発想の転換やアイデアで、書写に対して苦手意識の強い生徒への手立てになるのだと気付かされた。
- 作品で氏名を書く場所等、これまでなんとなく指導した内容をふり返ることができた。また、新たに学んだことも多く、さっそく本校の指導に生かしたい。「習字は深いな」と改めて感じることができた。
- 書写の指導における、練習方法や筆の洗い方の指導等、非常に勉強になった。
- 実際に書写活動を体験することができた。課題の字に忠実に書くことを目指して取り組んだが、筆運びや墨の量、筆のおろし方や洗い方など、基本的なことがたくさんあったことに気が付いた。児童生徒に教える前に、基本的な知識・技能を習得し、書く喜びを感じるための素地を養っていきたい。

実践報告及び実技研修を通して、児童生徒一人一人の書写の経験や実態の違いに合わせて指導していくことの難しさも改めて明らかになった。また書写指導にあたる教師自身の書写の経験の違いもあることから、教師自身が指導方法やアイデアを学び、書写指導を楽しみながら、自信をもって指導していけるように、実践的な実技研修の機会を今後より多く持っていく必要があると考える。

本年度は授業研究会という形で研修の成果を検証する場が持てなかった。小・中合同部会であることは、義務教育９年間の児童生徒の学びを見通し、課題や実践を共有することのできる貴重な場でもあるので、来年度は実現を望みたい。

4　実践事例　　※会員の実践報告からの抜粋

（1）甲佐中学校　　島田 志保　教諭

1　はじめに

研究テーマにある「自分の書いた文字が好きになる」「自ら気づき、高める」ことができるように、次の２点を特に意識して指導している。

◎その１「学習課題の明確化」と「ポイントをしぼって提示」　上達への近道

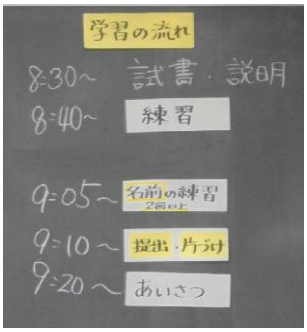
◎その２「試書と手本とを比較させ、練習」　課題解決（自己批正）できる力

2　取り組みの実際

毛筆書写の指導では、準備・片付けの時間を含めた流れを考え、めやすを示している。（下図）

毛筆の指導　（50分のおおまかな流れ）

①題材・めあての確認（2分）→　②試書（5分）→　③ポイント確認・筆順確認（空書き）（7分）→　④練習　★なぞり書き（半紙大のワークシート2種類）（10分）→　⑤清書（15分）→　⑥★提出・片づけ（10分）



1）楷書で書こう（教p12～13）　題材「若木」おおまかな流れ

2）めあて:「部分の組み立て方を確かめよう」

3）留意点・意識して指導したこと

◎その１「学習課題の明確化」と「ポイントをしぼって提示」

- **「若」のポイント**
  「上・下の組み立て」「一・五画目の横画の長さ」
  ＊できれば「口」（くち）の書き方　にも意識させる
- **「枝」のポイント**
  「左・右の組み立て」「『きへん』の二画目を右寄り・右上がりに」

★短時間でポイントをつかませるために・・・・
なぞり書き（半紙大のワークシート３種類）の活用

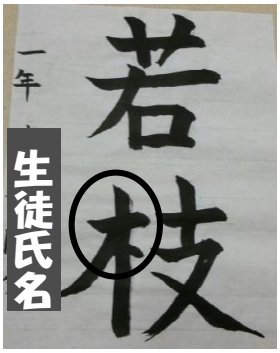
❶ 点画練習用

❷ 囲み文字(穂先あり)

❸ 組み立て方がわかるもの

◎その２「試書と手本とを比較させ、練習」　**＜1年生Aさんの試書と清書＞**

試書



清書

３　成果○　と　課題▲

○ ポイントをしぼって提示したことで、**短時間の練習でも変化が見られた**こと。

○ 作品を提出させる時に、「試書」と「清書」との２枚を比較させ、**改善できたところを言わせ、教師もその点をほめ、自信につなげた**こと。

▲ ポイント以外のところなどまで、意識がいかなかったり、練習不足だったりする作品が多かったこと（例えば、「枝」の右払いや、きへんの縦画の「止め」など）。

４　これから

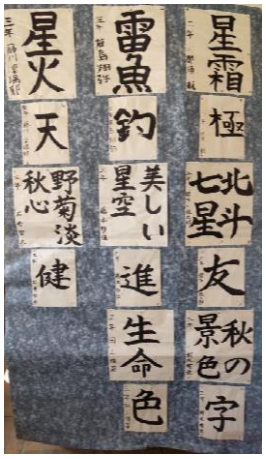
ポイントの提示は「**上達の近道**」「**整った文字を書くためのポイントを見る目を養う**ことにつながると感じた。説明したポイントの箇所について**少しでも変化が見られた生徒には特に、「よく見て書けたね」といった励ましの言葉**をこれからもかけていきたい。

そうすることで、子どもたちの文字を書くことへの意欲と喜びにつなげていこうと思う。

（２）山都町立清和中学校　中村 朋美 教諭

１　行事等と関連させた取り組み

○文化祭での展示



例年、清和中では神社の秋祭りと町の文化祭の時期に、書写作品の募集があっていた。今年度は中止がほとんどだったため、本校の文化祭にからめて掲示作品として仕上げることにした。

文化祭のテーマ「輝」にちなんだテーマを決めるようにした。「輝くものと言えば○○」という問いかけをし、学年ごとに注意すべき点（文字の大きさ・行の中心・余白の使い方・自分の字の特徴）を押さえたほかは、書体、漢字、ひらがな、カタカナ、 文字数などの制限を設けずに書かせたことで、味のある作品となった。

さらに3年生は今の自分を振り返り、「今の一字」を決めさせ、展示するようにした。振り返りの時間として、選んだ理由や気を付けたことなどを発表し全体で共有した。今回だけでなく、毎回書写の授業では、試し書きをして気を付ける点などを自分の文字に書き入れさせさせたうえで、清書に入るようにしている。

２ 授業での取り組み

○国語の授業において

国語の授業の中でも、自分の学習シート、俳句、短　歌、詩などの作品、作文などにも自分で気づきを書き込ませ、班でお互いにアドバイスを出し合う取組を行った。アドバイスを読んでもう一度自分で考える時間をとり、机間指導で個別に助言し、自分で課題を克服できるようにした。国語が苦手で発表に消極的な生徒にとっても、できるようになったところや良くなったところを前の作品やワークシートと比較して、アドバイスをもとに自分で気づく場面を設けたことで、自分の言葉で書き、他の発表の仕方を真似しながら発表することができた。発表に自信のない生徒にとっては、モデルとなる作品があることは有効な手立てだと感じた。

３ 成果と課題

〈成果〉

・比較やアドバイスの時間を設けたことで、自分の字や作品を客観的に見ることができるようになった。

・目標や評価の観点を明確にしたことで、達成することを生徒が意識した上で授業に取り組むようになった。

・地域と関連した作品募集などの取組ができることは、生徒の意欲付けにおいても大変有効だったと実感した。

〈課題〉

・個人差が大きいので、なかなか上達しない生徒に対する手立てを工夫改善していく必要がある。

・書写での学びを、普段の自分の書字にどう生かしていくのかを日頃から意識させる必要がある。